

メディア研究の手法

- 『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学 (2016 年 8 月) -

佐藤 匡*・神谷 和宏**

Technique of Media Studies

- ULTRA Series as a subject in Tottori University (Aug.2016) -

SATOU Masashi*・KAMIYA Kazuhiro

キーワード：ウルトラマン、怪獣、メディア、表象

Key Words: ULTRAMAN, Monster, Media, Symbol

はじめに

本稿は、2016 年 8 月 6 日及び 7 日に開講した『怪獣表象論講義Ⅱ～『ウルトラ』シリーズから日本の“近未来”を読み解く～』の第Ⅱ部（8 月 7 日）の講義内容に加筆及び修正を施した講義録である。

講師である神谷和宏氏は、現役の中学校教諭でありながら、評論等を執筆されているこの分野の第一人者である。彼と私（佐藤）との関わりについては、「メディア研究の視座－『ウルトラ』シリーズを題材として－」『地域学論集《第 12 巻第 3 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）及び「メディア研究の実践－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016 年 2 月）－」『地域学論集《第 13 巻第 1 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）に詳細に記したのでこれらを是非参照されたい。また、『怪獣表象論講義Ⅱ～『ウルトラ』シリーズから日本の“近未来”を読み解く～』の第Ⅰ部（8 月 7 日）の講義内容については、佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016 年 8 月）－」『地域学論集《第 13 巻第 2 号》』（2016 年，鳥取大学地域学部）をぜひ参照されたい。

さて、『怪獣表象論講義Ⅱ～『ウルトラ』シリーズから日本の“近未来”を読み解く～』は、『怪獣表象論講義～「ウルトラ」シリーズから戦後日本を読む～』に続く、神谷氏の鳥取大学での講義第 2 弾である。第Ⅰ部をその主な内容とする「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016 年 8 月）－」の冒頭でも述べたが、第Ⅰ回の評判が非常に良かったから実現したのである。しかも 2 日間である。その 2 日間の第Ⅰ部は「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016 年 8 月）－」に詳細は譲るが、「昭和のウルトラ（『ウルトラマン A』『この超獣，10000 ホーン』）から読み解く「若者」と「暴力」の行方」，「平成のウルトラ（『ULTRASEVEN X』『HOPELESS』）から読み解く「若者」と「暴力」の行方」という 2 つのテーマを比較し、「若者」と「暴力」について深く考察した。続く第Ⅱ部は、「昭和と平成の大衆の姿，優しさについて読み解く」というテーマで、『帰ってきたウルトラマン』『怪獣使いと少年』と『ウ

* 鳥取大学地域学部地域政策学科

** 北海道苫小牧市立和光中学校

ルトランマンメビウス』「怪獣使いの遺産」を視聴しディスカッションをした。

本稿は前半で「メディア研究の意義—『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）—」において述べられなかった国語科教育との関係について考察する。神谷氏は現役の国語科中学教諭であり、日々教壇に立たれている。なぜ中学生ではなく大学生に講義をするのかといった理由についても述べてもらっている。

本稿の後半では、第2部を中心に論じている。第2部で主張した作品は、実は続きものとなっている。ゆえに、これを連続して視聴することは大いに意義がある。と同時に私が前任校において初めて神谷氏に講義を依頼したときに視聴した作品でもある。私が鳥取大学に着任する直前に行った講義であるのでもう4年も前になる。この4年間で社会の状況も変化したし、私の状況も変わった（鳥取大学に着任したので）、また、神谷氏の状況も変化した（昨年ご結婚されたので）。というわけで4年前とは違い、また新たな発見がたくさんあった。

本稿を纏めているのは2017年1月である。月末には神谷氏の鳥取大学での講義第3弾が控えている。3回目ともなると最早学期末の恒例行事の感すらあり、鳥取大学地域学部の私（佐藤）の研究室に所属する学生たちからは、バイトのシフトを空けるので早く神谷先生の講義の予定を教えてくださいとの嬉しい質問が普通に寄せられるようになっている。

今回は国語科教育との関係について深く追及をしたいということなので、門外漢の私はひとまず神谷氏に筆を預けることとした。

一 第1部を振り返りつつ国語科教育との関係を考える

1 国語科教育におけるメディア教材の位置付け

現行の学習指導要領¹は、明確に「脱・ゆとり教育」を掲げた²。これは、経済協力開発機構³（OECD）によるPISA調査⁴の結果を受けたものであることは疑いようがない⁵。そして、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題がある。これらの力は現行学習指導要領が重視し、子どもたちが社会において必要とされる力であることから、大きな課題であると言わざるを得ない。」とした⁶。

このことから、「PISA調査の読解力や数学的リテラシー、科学的リテラシーの評価の枠組みなどを参考にしつつ、言語に関する専門家などの知見も得て検討した結果、知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむための学習活動」というものを分類したとし、各教科における学習活動例を列挙している。そして「これらの能力の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である。」と解説する⁷。

PISA調査の読解力の順位について触れておくと、以下ようになる（括弧内は得点）。

	2000年 ⁸	2003年 ⁹	2000年と2003年の比較では、数学的リテラシーが1位から6位へ、科学的リテラシーは2位のままなので、読解力の低下が注目されることとなった。さらに注目されたのが、フィンランドの国語教育であった ¹⁰ 。
日本	8位（522点）	14位（498点）	
フィンランド	1位（546点）	1位（543点）	

山本茂喜によれば、PISA調査における読解力を問う問題については、「連続テキスト」と「非連続テキスト」を扱うものと分けられているのだが、日本人の得点が低かったのは後者の方であるという¹¹。そして、フィンランドの国語教科書が、日本のものとはまったく異なり、「報道写真」

「CM」「広告」「TV番組の画像」「映画」「マンガ」などの多種多様なメディアが教材として掲載されていると指摘する¹²。

先に「数式などを含む広い意味での言語」という件を引用したが、その他にも、美術や音楽で扱う絵画、声楽などが、言語を介して「思考・判断・表現」の諸活動を行う言語活動となり得るべきものであると示される等¹³、この非連続テキストを意識した言語活動例が学習指導要領解説に示されることとなった。

私が1990年代から（当初は高等学校の国語科教育で）『ウルトラ』シリーズ等を題材として扱う国語科教育を行ってきたが、さらなる実践はこのような流れが追い風となり、活かされることにもなった。

昔から、教師が学習の過程でテレビ番組等を扱うことは珍しくはなく、自分の行っていることも特段、注目されるようなことではないと考えていた。しかし、本を出版¹⁴したことでメディアに出る機会も得¹⁵、その後には教育委員会の中の教育研究所から、紀要に「ウルトラマンを扱った国語授業の実践」を寄稿するよう依頼があるなどし、年に3回程度は、国語科教育の中で『ウルトラ』シリーズを扱う読解の授業を実践してきた。

しかし、管理職から「俺はそういう授業を認めた覚えはない」、「俺の知らないところでやれ」と言われたり（その管理職は家庭科の教師が、子育ての領域の指導のために『仮面ライダー』を生徒に見せることについては何も言わない）、異動先の学校では学校アンケートに「受験に関係のない「ウルトラマン授業」はやめてほしい」等の回答が寄せられたりした。教育委員会からも、自分の実践を好意的に受け止めてはいないようだと感じられることも生じるようになった。

また、『ウルトラ』シリーズをしっかりと読み解こうと思えば、中学校の国語科教育の範囲内で理解をすることは難しく、ともすれば表層をなぞったような理解に終始しかねないという困難を感じることもあり、自ら中学校における『ウルトラ』シリーズを扱う読解の授業は打ち切った（その後、別の学年を持つ中で数回だけ行った）。

現状、私がメディアを使った教育活動を、中学校ではほぼ行わず、大学で行うのには以上のような2つの理由があった。

2016年8月には、ポップカルチャー¹⁶の表象性を解く試みとして、ポップカルチャーによる「未来の予見」を通して、2020年に、日本人（主に若年層）がテロリストになる可能性はあるのかどうかを考える授業を行った（なお、この講義についての前半部分については、拙稿「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－」『地域学論集《第13巻第2号》』（2016年、鳥取大学地域学部）で触れた）。

2 なぜ2020年かー2020年の社会学的意味ー

2回目となる東京でのオリンピック開催が決まったことで、いやが上にも、私たちの国にとって「2020年」は特別な意味を持つ年となった。

社会学の言論の中では、もともとこの「2020年」に意味が見出されていた。大澤真幸は自身の師である見田宗助の理論をもとに、「1945－1970」、「1970－1995」、「1995－」という時代区分を設定していたが、特徴的なのは、これが「25年周期」であることだ¹⁷。

上記の節目の1970年といえは、万国博覧会が開催された年で、この年をもって「東京タワー設立（1958）」、「新幹線開通（1964）」、「東京オリンピック開催（1964年）」と続いた、いわば日本の近代化を象徴するようなイベントは終結する。

北田暁大は、この万国博覧会を、戦後の日本のシステムが「完成」したことへの国民上げての祝

祭であり、「戦後日本社会のある種の飽和点を指し示す事件」と説く¹⁸。

また、1995年は「地下鉄サリン事件」や「阪神大震災」という、戦後まれに見る人災、天災があり、そのイメージで語られることが多いが、この年から長期に亘るデフレがスタートしたと捉えられていることは見過ごせない¹⁹。

また、肌身で感じられる状況としては、マクドナルドのハンバーガーが一気に大幅値下げをするなど²⁰、日本がダウンサイジングを受け入れた（余儀なくされた）、つまり、バブル回帰を諦める、「脱バブル」の開始期であったと考えることができる。

以上のように考えると、時代の周期が大体25年であるということには説得力がある。

3 『ウルトラ』シリーズと2020年

1966年に放映された『ウルトラ』シリーズ第1作、『ウルトラQ』第19話「2020年の挑戦」というストーリーがある。

本作に出てくるケムール人という怪人は、2020年から来たという設定で、高度に知能は発達しているものの、身体が衰えてきたことを理由に、過去の世界へやってきた。

未来人が知能は発達させているものの、身体を衰退させているという想像力から生まれたエピソードと言える。

現代に生きる私たちは、『身体性』を失い続けていると考えられる。

私的な経験に基づくことになるが、昨年、生徒を引率して炊事遠足へ出かけた。煉瓦で作った囲いの中に薪を並べ、竈を作る。火を入れて、その上で飯盒に入れたご飯を炊く。弱火と強火の調整が必要で、飯盒の底に火が届くとか、届かないといった距離で調整する。

この体験から思ったことは、機械に依らないで生活をするということは相当な身体感覚を必要とするということであった。私たちは普段、スイッチを「オン/オフ」するとか、何かの加減を「強/中/弱」にするとか、ボリュームを「1~15」で切り替えるといった、あらかじめ組まれた選択肢の中から好みの加減を選ぶという行動を繰り返している。このような行動の積み重ねが、アナログな身体感覚を損ない、「定められた選択肢から選ぶ」という思考回路の構築につながることはあり得る。

しかし、実際には、社会事象は決して二元論的に分類できることばかりではない。3択や4択、あるいはそれ以上の選択肢があったにせよ、選択肢の中に提示されたものが正解であるとは限らない。むしろ選択肢の外や、ある選択肢とある選択肢の中間にこそ妥当性が見出せるかも知れない。

『ウルトラQ』「2020年の挑戦」を、2020年に近い今日、改めて見ることで読解できることは、身体そのものというよりは、身体性を著しい喪失した現代人の姿である。

4 2020年、日本はテロリストを生むか

本講義の前半では、『ウルトラマンA』（1972年）「この超獣10,000ホーン」と、『ULTRASEVEN X』（2007年）「Hopeless」を比較的に視聴し、現在の若者を取り巻く状況を「輝かしい未来を信じる若者」不在であるが故に、暴力性を欠き、安定した社会が構築されているとして、それは果たして健全な社会と言えるのだろうか」という見解を学生とともに導いた²¹。

その他にも、現代を取り巻く問題点として「悪を徹底排除する正義原理主義」が台頭していること、日本が「スポーツによる再立国」を目指していることで浮上する懸念、そして、本稿で先に触れた「身体性の喪失」の問題を踏まえて、2020年はどんな日本になるのか、特に「正義原理主義」が若者の暴力性に蓋をし、行き場をなくした暴力性がイスラム過激派のようなテロリズムにつながることはないのか、その点を考えていくこととした。

- ・ 2020年というか、未来がどうなっていくかについては全然思い浮かばなかったです。でも、数字にどんどん依存していく中で、犯罪というリスクを冒すことへの恐怖が増大して犯罪数はどんどん減っていくとは思いますが。でもそれと反対に、溜まったフラストレーションが爆発して、重大な犯罪を犯す人の割合は増えていくと思います。ただテロを起こすというようなわかりやすいリーダー、カリスマ性のある人物が生まれるかには疑問が残ります。だから今思っているようなテロとはちがった形のテロが起こりそうだなと思いました。
- ・ 『ULTRASEVEN X』を見て、今の若者は意志がはっきりしていないとか、他者への関心が薄れているなど感じました。こうした意志の弱さによって、何か強い力を持つ人に誘導されてテロリストになってしまう可能性も考えられるのかなと思いました。
- ・ 身体性の欠如は、他車の傷みを知らないということにもつながり、正義原理主義による「悪」を叩きつづす思考につながるのではないかと感じた。自分にまったく関係なくても、ストレス発散の道具の1つとして世間的な「悪」に矛先が集中し、叩きつづしても良いという感覚で徹底的に叩きつづすということが起こり、殺人等にも発展してしまう危険があるのではないかと考えた。

まず、上記のような意見が寄せられた。そこからディスカッションに入った。その結果、私が講義中に段階的に提示した、2020年、和製テロリストが生じるという最悪のシナリオ「悪は絶対に許さないという正義原理主義が若者の暴力性を封鎖する。しかし、窮状に置かれる若者は少なくなく、自己責任論が台頭する中で彼らは助けられることなく、そうなると、現在の社会のルールでは敗者復活を望めないと感じることで、既製の社会秩序の破壊に走るのではないか。しかも身体性が欠如する中で、その暴力性の発露はさじ加減を欠いた極端なものになるのではないか」についての異論が聞かれた。これはもちろん、私が望む展開である。

「テロを起こすには信念が必要。そんな熱い思いを持った人すらいなくなるのではないか」、「日本人は多い方に振れる。少数派として何かをしようとする人はいなくなるのではないか」、さらに、「宗教がある程度力をつけるというのは想像がつかない」といった意見が寄せられ、派生して「先の大量殺人（この講義の半月前に起こった、相模原市の障害者施設での大量殺人事件）の犯人にはある種の信念（本人にとっては正しいもの）があったのだろう」といった意見が出て授業は終わった。

2020年に日本人のテロリストが出るかどうかはもちろんわからない。また、出てほしくないと思うのは誰でも同じことだろう。しかし、(近い)未来を予見することは、現在の社会問題、それも発芽以前の諸相を見定めることにほかならない。それを本授業では、『ウルトラ』シリーズというフィクショナルなコンテンツを扱うことで考える機会とした²²。

二 第2部『昭和と平成の大衆の姿、優しさについて読み解く』

第1部の内容を踏まえた上で、第2部として、もう1つの大きなテーマである「正義論」についても触れた。題材とするのは『帰ってきたウルトラマン』（1971年）「怪獣使いと少年」と、その続編となる『ウルトラマンメビウス』（2006年）「怪獣使いの遺産」である。そのあらすじ、視聴後のワークシートの設問とそれぞれの回答について以下に集約した。

・第1作目あらすじ

『帰ってきたウルトラマン』第33話「怪獣使いと少年」

脚本・上原正三／監督・東條昭平

地球に探査目的でやってきたメイツ星人。メイツ星人は、一人の少年と知り合う。少年の名は佐久間良。身寄りのない少年だった。

2人は工業地帯のぼろぼろのバラックに身を寄せて一緒に住むようになった。(メイツ星人も人間の姿になり、金山と名乗っている。)

しかし、民衆は、あまりにみすばらしく、異様な雰囲気醸し出すこの二人を、宇宙人と憶測していた。また嫌がらせでこのバラックを訪ねる者もあり、良に危害を加えようとするため、やむを得ず金山は見えないところから超能力「真空投げ」を使い、心ない者から、良と自分の身を守るのだった。

また、良はしきりに穴を掘り続けていた。地中には、メイツ星人が隠した円盤があるはずだから。メイツ星人は当初、超能力で円盤を隠したのだが、環境汚染のひどい地球で著しく体力を消耗し、自力で円盤を出すことができなくなっていた。良は円盤を探し出し、金山と一緒に、地球を去りメイツ星に行くのだという。自分を迫害する人間に絶望していたのだった。

そんな良に対する、宇宙人ではないかという疑問視、そして迫害は続き、商店に行っても、パンさえ売ってくれない。

郷秀樹(＝人間時のウルトラマン)はそんな良を不憫に思い、調査したところ、良は北海道江差町の生まれで、父は炭鉱の閉鎖で東京へ出稼ぎに来たまま失踪、その後、母は病死。親戚に引き取られるも、そこでの居心地は決して良くなく、父がいるはずの東京へ出てきたのだと判明した。

ある時、民衆の不安感は頂点に達し、暴徒と化してバラックに大挙、良を連行しようとした。すると、それまで姿を隠していた金山は、人々の前に現れ、宇宙人は自分だと、正体を告げる。郷は叫ぶ「宇宙に帰りたいがっているのだから、帰してやりなさい！」しかし、その瞬間、銃声が響いた。

暴徒の中にいた警察官が、金山に発砲したのだ。苦しむ金山に向けてさらにもう一発発砲した。金山は緑色の血を流し、メイツ星人の姿となって死んだ。

すると、怪獣ムルチが出現した。郷はつぶやく「まるで金山さんの怒りが乗り移ったかのようだ」。人々が郷に「早く退治してくれよ」というのを聞き、郷は「勝手なことを言うな。怪獣をおびき寄せたのは自分たちだ」と言うが、町を破壊する怪獣を前に、変身。ウルトラマンはムルチを倒すのだった。

遭された良は、金山の埋めた円盤を見つけようと、ただただ無心に穴を掘るばかりだった。

・第2作目あらすじ

『ウルトラマンメビウス』第32話「怪獣使いの遺産」

脚本・朱川湊人／監督・八木毅

ビオという名のメイツ星人が地球に到来した。彼の乗ってきた円盤には怪獣が搭載されていることからCrew GUYS(地球を防衛する組織)は警戒した。

ミライ（＝人間時のウルトラマンメビウス）はビオと会い、話をした。ビオは地球との友好関係を持つために来たのだという。怪獣を連れてきた理由は、地球人にはウルトラマンメビウスという味方がいるからだという。そんな会話の最中、ビオを侵略者と見なしたのか、Crew GUYS のリュウ隊員が発砲。ビオは手を負傷してしまう。ビオは、やはり地球人は自分たちと異なるものを排除しようとするのだと悟る。

ビオは過去に、仲間が殺された賠償として地球の領土の 20%を割譲するよう求める。地球人がそれに従わないと知るや、ビオは円盤からの砲撃、連れてきた怪獣ゾアムルチを出現させることで地球を攻撃する。説得にきたリュウに対しては、かつて殺されたメイツ星人は自分の父親なのだと告げる。

人間に姿を変えて様子をうかがっていたビオに幼稚園児たちが近づいてきた。園児たちはビオの負傷した手を見て、ハンカチを差し出す。ビオの青い血を見た幼稚園の先生があの人宇宙人だわ、と言っても園児たちは、宇宙人だって怪我をしたら痛いはずと言い、怖がることなく接した。

園長が語る。園長は 30 数年前にビオの父と接してきた少年（＝良）と話したことがあるのだという。そしてあなたのお父さんが地球に蒔いたのは「優しさ」という種だという。

ビオは、父が遺した優しさが地球人に受け継がれていることを知る。これまで抱き続けてきた憎しみと、地球人の思わぬ優しさの間に葛藤する。そしてその葛藤を砕くように、ウルトラマンメビウスがゾアムルチを倒すのだった。

ビオは、地球を去ろうとしていた。先に、ビオを撃ったリュウが握手を求める。すると、父の蒔いた優しさの種の行方を確認するときまで、握手はしないでおこうと言って、宇宙へと帰っていった。

ラストシーン。30年近く前。少女（後の園長）が見るのは、夕暮れの中を一心不乱に、しかし、どこか楽しそうに穴を掘る良少年の姿だった。

・第 1 作目ワークシート

Q 1 「怪獣使いと少年」について、作品に反映された作者の意図、あるいは無意識に反映されたものは何であると考えますか。また、他に気づいたことはありますか。

A 1 自分と違うものを受け入れられない人間の不寛容さ。

A 2 自分たち中心の方向性の中で、外部からの者を排除していく思想が育てられてしまったのかなと思った。

A 3 互いに信じることで悪から善への転換の可能性。

A 4 大衆の暴力性。

A 5 戦闘時の雨の演出がウルトラマンの心情描写のように感じた。

A 6 怪獣が暴力性の象徴として描かれているが、人間はまだ暴力性を自分たちで排除できていないとも考えられる。

A 7 既成の価値観、つまり賢い人、教授が行っているから、テレビでいっているから、ヒーローだから、といったイドラ的な偏見を疑い直す必要性。

A 8 相手（悪者）の背景などを見ようとせず、表面的なもので判断してしまう。

A 9 知る選択肢があるのに、知ろうとせずに相手を排除してしまう。

A10 弱い者を排除するという社会。

A11 差別的表現がセリフ中にあり、今ほど規制がかかっていない。

A12 悪と見なした者を多勢に無勢で叩きつぶす現代人に近いと感じた。

A13 今まで、ヒーローはみんなの憧れの存在で、彼らが正しいと信じてやまなかったけど、それは実は誤った認識だったのではないかと、怪獣表象論の講義を受けていつも思われます。

A14 「日本人は美しい花を作る手を持つが、一旦凶器を持つと残忍になる」という旨のセリフがあるが、個としては正しい判断力を持つのに、集団になることで周りに流されたり、考えたりすることをやめることがある。

・第2作目ワークシート

Q2 「怪獣使いの遺産」を見た後に思ったこと。

A15 原爆投下後の日本とアメリカの姿がオーバーラップされました。北朝鮮や中国との関係も良くなればと思いました。

A16 自分とは違う存在にでも手を差し伸べられることや、暴力がなくても物事を解決できるということ。

A17 他者への共感を持つこと。

第1作目を視聴した後のQ1へ対する、A1, A2, A4, A7, A8, A10の回答は、ややステレオタイプな感はある。しかし、昨今のイギリスのEU離脱や、アメリカのトランプ大統領による保護主義の打ち出しにも象徴的に見られるように、今日の社会がステレオタイプ、つまり、旧態依然、典型的な排外主義の上に成り立っていることを考えれば、むしろ奇を衒うことのない適切な読解であるということができる。

秀逸であったのはA6であろう。メイツ星人の怨嗟を象徴するかのごとく出現暴れ出した怪獣ムルチはウルトラマンによって退けられたが、そのことでかえって、退けられていないものが何であるのかということはこの回答者は考えている。その点に思いを馳せると、ウルトラマンは大衆の暴力性は退けることができず、それは私たちの社会に内在したままであるということが想像できるのである。

A3とA9は同様の主旨の回答といえるであろう。自分たちの外部に属するとされるものをもっと知ろうと思えば知ることができるのに、敢えてそこから目を背け、相手を知らないでいることにより、排除の対象としてしまうという状況を批判的に捉えた回答である。自分たちに対置されるものをよく知り、それが自分たちから見て悪の概念に属するものであっても、なぜそれが生じたのか、どうすれば良いのかを考えれば、互いに歩み寄ることもできるだろう。にもかかわらず、それを行わないのは、人々にとっての共通の敵を設定することで内側が結束する効果を望むからであろう。このような手法は見飽きるほどに多々用いられるが、最近ではトランプ大統領の就任演説で用いられた。トランプ大統領は就任演説の中で、イスラム過激派の殲滅を声高に訴え、聴衆の熱狂的な喝采を浴びていたが、そこに決定的に欠けているものは、イスラム過激派、またアメリカに敵対する存在はなぜ生じ得るかという視点である。メイツ星人を排除する大衆の中では、歩み寄る姿勢を見せることすら批判の対象となっていた。このことはつまり、メイツ星人を虐殺した大衆の姿は、虚

構世界に特殊な事例などではなく、普遍的に私たちの身近で見られる精神の情動の喩であることを示唆するものなのである。

A5はイメージリー（文芸作品中で、象徴的に描写される事物）の問題で、映像作品の場合、登場人物の心情、ドラマの展開等を暗示する種々の事物が象徴的に描かれることがあり、このことは映像メディアを扱う上では再検討の余地があるだろう。

A11はセリフ中に聴覚障害者を示す差別表現があったことに触れたものである。昨今の方が、このような表現に対する自主規制は強く、社会的弱者への配慮は進んだといえるが、この自主規制がいきすぎているのも現代の特徴であり、無思考的な配慮は、逆に本作が扱うような立場の異なるものを理解しない態度につながっていくこともあり得るのではないだろうか。

第2作目を視聴した後のQ2に対する回答はいずれも、現状顕在化する問題点があるからこそ、それを乗り越えることでなにかの好転があるという視座に立ったものである。

それを具体的に論じたのはA15で、日米の関係は、対立する関係から協調する関係に至った2国を示すものだが、現状、日本と対立し合うことの多い、中国や北朝鮮との不和の問題に触れている。

もっとも考察の余地があるのはA16である。イスラム過激派が外国人を拉致し、身代金を求めたり、殺害したりすることで自らの力を誇示するのも暴力であれば、先に触れたように、過激な殺戮集団がなぜ生まれたのかという眼差しを持たずに、彼らの排除のみを粛々と進めるのも暴力である。また、暴力とは、武力等の物理的な力によって対象を退けることのみを指すものではない。私たちに異論を語らせることを封じ、批判的な思考を奪うこと、画一的な思考や態度を共生させるものも暴力であるだろう。これらのことも視野に入れ、今後の怪獣表象論講義では、この暴力というタームをキーワードの1つとしていくことを考えている。

おわりに

まず、私（佐藤）が神谷氏に講義を依頼している理由を改めて述べておきたい。そもそも、私と神谷氏とでまったく同じ思想を共有しているわけではない。ものの考え方や立場も違う。そのもっとも特徴的なのが、例のサブカルチャーvs ポップカルチャー論争である。ゆえに、神谷氏の考え方イコール私の考え方と考えないでいただきたい。

そのうえで、なぜ、私が神谷に講義を依頼するのか。それには3つの理由がある。

1つは、神谷氏自身が非常に寛容であるということである。つまり、自分と異なる考えに対して耳を傾け、それを否定することなく、自由に議論をする場を作ることができるということである。大学生ともなると、当然自分なりの考えというものを持つようになる。しかし、それを頭ごなしに否定し、自分の考えを押し付けることは愚の骨頂である。私は、神谷氏のような考え方を受け入れる寛容さに、大学生に議論の場を与える力を感じたため、はるばる北海道から半年に一度鳥取において願っているわけである。

もう1つは、大学生に様々な意見があることや様々な表現方法があるということを知ってもらいたいということである。神谷氏は表現者でもある。様々な執筆活動を通して情報を発信している。そこには独自の工夫がみられる。ゆえに、このような表現者や表現方法があるという1例として紹介したいと思って講義をお願いしている。

最後は単純に面白いからである。子どもの頃に見て、子どものものと思っている番組に対して、真面目に視聴し、質問に真面目に応え、真面目に考える。実に滑稽なように見えて、これが学問の本質なのではないかと思うのである。私は、学問ぽくないもので学問するといっているが、ぽくな

いものの中にこそ真理があるのではないかとも思っている。

私は法律家である。ゆえに、神谷氏の取り組まれていることとは関連がないようにも思われるかもしれない。メディアという共通点があることについては、拙稿「メディア研究の視座—『ウルトラ』シリーズを題材として—」『地域学論集《第12巻第3号》』（2016年、鳥取大学地域学部）において述べたので参照されたい。しかし、それ以外にもある。そもそも法というものは人と人との争いごとを予防する機能と争いごとを解決する機能を有している。そう、人と人である。原告の立場と被告の立場がある。それが対立する場面が争いごとであるが、神谷氏も双方の立場というものを非常に大切に考察する。ヒーローものというのは勧善懲悪が多い。しかし、神谷氏が選ぶのはそのような話ではなく、いろいろな立場の人間の思いが交錯するような話が多い。もちろんそういう話の方がコンテンツとして秀逸である傾向があるので、教材としては利用しやすいということもあるであろう。しかし、神谷氏の切り取り方が実に上手いのである。実際の訴訟の現場にも勧善懲悪のようなことは少ない。もちろんあることにはあるが、大抵は、より悪いのはどちらかということとを争う。つまり、完全に悪いと簡単に判断できるようなことは稀である。ゆえに、利益衡量をする。どちらがより悪いのか、より責任が重いのはどちらかといったことを、自分の中の秤で量るのである。しかし、学生はこれが苦手である。利益衡量型の思考ではなく、勧善懲悪型の思考に陥りやすい。酷い場合には、味方以外はすべて敵といった完全2項対立型の思考しかできなくなる。

人には人の考え方があり、その考え方を尊重する。これが近代憲法学の基礎中の基礎である。近代憲法学の基礎は1人1人の人を個人として最大限尊重するところにある。そのためには少数者であってもその意見を尊重しなければならない、これが立憲主義であり、立憲民主制とは、ただの多数決民主主義ではなく、少数者に配慮した民主制をいう。その基礎となるのは他者の立場を考えるということである。神谷氏の講義はこの他者の立場への配慮の心を醸成する。

今回視聴した『帰ってきたウルトラマン』第33話「怪獣使いと少年」と『ウルトラマンメビウス』第32話「怪獣使いの遺産」は絶対に視聴していただきたい話である。前者を見ると人間の醜悪さと未熟さが身にしみてわかる。後者は逆に人間の美しさと寛容さがわかる。しかし、必ず2つ続けて視聴することをお勧めする。前者だけ視聴すると嫌な気分だけ残るため精神衛生上よくない。また、後者だけ視聴するとあまりにすっきりした印象を受けるであろう。それであると後者の本当の姿が浮かび上がらない。ゆえに、双方を連続して視聴することを推奨する。

上記2作品を視聴し、神谷氏の講義を聞き、議論したのは今回が2回目であるが、1回目とは違う見方ができた。2回目ということで細かい描写にも目を向けることができ、それがまた違った理解を導いてくれた。ゆえに、学生たちにも1つのもの1度だけ見て判断するのではなく、2度も3度も見て、よく考えて判断できるようになってもらいたいと思う。

さて、1月29日には、神谷氏の講義である『怪獣表象論講義』の第3弾が開講される。今回のテーマは、「ポストモダン社会のヒエラルキー、頂点に立つものは？」である。神谷氏はいう。「日本人にとっての「大きな物語」であった西欧的な豊かな暮らしの実現という、国民総意の目標が存在していたときには、ウルトラマンや防衛隊は、大衆の信頼を得ることができていた。しかし、豊かな国となった日本は、新たな「大きな物語」を構築できず、そこには無機質なヒエラルキーが存在することとなった。そこではウルトラマンや防衛隊さえもその機能を十分に発揮することができない。そのような社会のヒエラルキーの頂点に君臨し、私たちを統治するものは一体何なのか。そこでは、何が重んじられ、何が切り捨てられているのか。つまり、社会では“四捨五入”が無限に繰り返され続けているのである。そこでは、掛け替えのないものを“四捨”してしまっていないだろ

うか」と。

私の提案で始まった2016年2月の第1回、学生からの要望に応えた同年8月の第2回、そして、今回も学生からの要望で実現した2017年1月の第3回。学生には神谷氏の手法を取り入れて卒業研究に取り組む者もいれば、神谷氏の手法を取り入れて研究したいがために私の研究室に所属したいと希望する者もいる。

提案した当初よりも短期間で大きな効果を上げていることがわかる。面白いのが、『ウルトラ』シリーズのファンになりましたとか、『ウルトラ』シリーズをもっと見たいという意見がほとんどなく、「神谷先生の考え方を導入したい」という意見が圧倒的に多いということである。私的には、純粋に『ウルトラ』シリーズに興味を持ってもいいものだと思うのだが、そうはなっていない。この答えは、恐らく神谷氏の手法が一般化されているからであろう。つまり、『ウルトラ』シリーズはあくまでも素材であり、真の目的は、『ウルトラ』シリーズを広めることではなく、考え方の手法、つまり、『メディア研究の手法』を伝えることにあるからである。

その『メディア研究の手法』をどれだけ習得したのかについては、今後、神谷氏の講義を受講した学生たちが、どのような卒業研究をなすかにかかっている。もし、彼ら彼女らが本当に楽しく卒業研究に打ち込め、卒業論文を仕上げ、卒業研究に打ち込んだことが大学時代の輝かしい思い出となるのであれば、紹介者としては望外の喜びである。

【参考文献】

- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の視座－『ウルトラ』シリーズを題材として－」『地域学論集《第12巻第3号》』（2016年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の実践－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年2月）－」『地域学論集《第13巻第1号》』（2016年，鳥取大学地域学部）
- ・ 佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－」『地域学論集《第13巻第2号》』（2016年，鳥取大学地域学部）
- ・ 神谷 和宏『3分あれば世界は変わる』（2015年，内外出版社）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマン「正義の哲学」』（2015年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンは現代日本を救えるか』（2012年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『ウルトラマンと「正義」の話をしよう』（2011年，朝日新聞出版）
- ・ 神谷 和宏『M78星雲より愛をこめて』（2003年，文芸社）

【注】

- 1 現行の学習指導要領（中学校）は、平成 20 年度～23 年度が移行期間で、平成 24 年度から完全実施。
- 2 現行の学習指導要領について、文部科学省はパンフレットの他、サイト内でも「現在の学習指導要領は、子どもたちの現状をふまえ、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視しています。これからの教育は、「ゆとり」でも、「詰め込み」でもありません。」と説明する。「ゆとり教育」は 1970 年代後半に提唱され、1980 年代に本格議論がなされ、徐々に施行された。従来の学習カリキュラムの一部を削減し、個性の伸長、国際化、情報化への対応力などをつけさせるというもので、これらは当初「新しい学力観」と呼ばれた。
- 3 経済協力開発機構（Organization for Economic Co-operation and Development）のこと。本部はフランスのバリ。経済開発、開発途上国援助、自由かつ多角的な貿易の拡大、の 3 つを目的としている（外務省パンフレット、外務省経済開発機構室編『経済協力開発機構と日本』（2008、外務省）3 頁参照）。
- 4 P I S A の正式名称は” Programme for International Student Assessment”。国際的な学習到達度に関する調査で、15 歳児を対象に読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーについて、3 年ごとに調査が実施される。
- 5 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（平成 19 年 11 月 7 日・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）からは、学習指導要領改訂の際に” P I S A ”という語句が随所に現れ、P I S A の結果を反映したことが伝わる。
- 6 注 5 前掲資料 13 頁参照。
- 7 注 5 前掲資料 25 頁参照。
- 8 2000 年の P I S A 調査の結果については、文部科学省サイトから確認することができる。
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm (2017 年 1 月 20 日確認)
- 9 2003 年の P I S A 調査の結果については、文部科学省サイトから確認することができる。
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm (2017 年 1 月 20 日確認)
- 10 石原千秋・齊藤美奈子（対談）「『道徳』よりも『リテラシー』を！国語教科書は何を教えているのか」『ユリイカ 2006 年 9 月号「特集*理想の教科書」』（2006 年、青土社）54 頁及び、山本茂喜「フィンランド国語教科書と日本の教科書」『国文学 2008 年 9 月号』（2008 年、学燈社）80 頁参照。
- 11 山本注 10 前掲書 82 頁参照。
- 12 山本注 10 前掲書 81 頁参照。
- 13 文部科学省「感じ取ったことを言葉や絵にすることにより、感性を育む事例」及び、文部科学省「能の音楽に関心をもち、謡曲にふさわしい声で歌唱表現をしたり、能のよさや美しさを理解して鑑賞したりする」参照。
- 14 神谷和宏『M7 8 星雲より愛をこめて』（2003 年、文芸社）のこと。
- 15 2007 年 7 月 17 日放映 TBS『筑紫哲也 NEWS 23ー特集ヒーローが見た日本ー』のこと。
- 16 このポップカルチャーという語を用いるかどうかについては、神谷と佐藤との間で未だに合意が得られていない。詳細については、佐藤 匡＝神谷 和宏「メディア研究の意義ー『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016 年 8 月）ー」『地域学論集《第 13 巻第 2 号》』（2016 年、鳥取大学地域学部）を参照。
- 17 大澤真幸『不可能性の時代』（2008 年、岩波書店）2 頁参照。
- 18 北田曉大『《増補》広告都市・東京』（2011 年、ちくま学芸文庫）185 頁参照。
- 19 いつの時点をもってデフレが始まったと考えるかは、どの指標の何の数値を見るかによって変わるものの、GDP 物価指数は 1995 年から下がり続けている（一般財団法人南都経済研究所）。また、国債の 10 年利回りの金利が 1994 年以前では、下落傾向にありながらも上下動していたのが、1995 年には初めて 3 % を割り込み、以後下落の一途を辿っていることから判断した。
- 20 「日本マクドナルドは十四日から、ハンバーガー、チーズバーガーなど四品を三〇%前後値下げする。ハンバーガーは現行の通常価格二百十円から百三十円に、チーズバーガーは二百四十円から百六十円になる。』『朝日新聞《1995 年 3 月 9 日朝刊》』参照。
- 21 拙稿注 16 前掲論文参照。
- 22 2020 年にテロリストが日本で生まれるかどうかという、現実的なことについて、なぜフィクショナルな作品を使って考えるのかということについては、拙稿注 16 前掲論文に端的に記した。

(2017 年 1 月 27 日受付, 2017 年 2 月 1 日受理)